高句麗および百済の都城と瓦

はじめに　日本の都城建築に最初に瓦が葺かれたのは、7世紀末、藤原宮においてである。瓦自体は、6世紀末、飛鳥寺の造営に際して百済から導入されており、瓦葺き屋根は、以後寺院建築に広まった。宮殿建築での瓦の使用まで1世紀を要したことになる。

では、日本古代瓦の源流をなす百済をはじめ朝鮮半島の宮殿建築と瓦をめぐる状況はどうか。高句麗と百済の都城遺跡をとりあげ、いくつかの問題点にふれてみたい。

高句麗

【前期（前1世紀初頭～3世紀初頭、卒本時代）】中国遼寧省桓仁県に都城遺跡がある。まず、鴨緑江の支流である渾江中流域の桓仁市街地の北東約8kmに五女山城（標高820m）がある。対になる平地城として、従来、五女山城の西北約3kmの下古城子土城をあててきたが、近年、北東にある蜊哈城が有力視されている（田中俊明説）。なお、この時期の高句麗都城での瓦の使用はない。

【中期（3世紀初頭～427年、国内時代）】遺跡は鴨緑江中流域の中国吉林省集安市にある。都城（国内城）は山城子山城（周長約6.9km）と通溝城（周長約2.7km）からなる。高句麗において瓦の存在を確認できるのは中期からである。中期の瓦は、通溝城内でも、ごくわずか出土しているが、遺構との関連は不明で、王宮との関連も確認できない。一方、墳墓（墳丘）では瓦の使用がみられ、それは4世紀前半の臨江塚から5世紀初めの将軍塚まで続く。いずれも大王陵級の積石塚である。中期の瓦は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、磚などの種類がみられる。軒丸瓦には、当初、漢瓦系統の巻雲文、のち、4世紀後半には、蓮華文が採用され（太王陵）、以後これが高句麗軒丸瓦文様の基軸をなす。

【後期（427～668年、平壌時代）】後期の都城は大同江下流域の平壌に移る。史料によれば、平壌のなかで、一度位置を変えており、前半（427～586年）を前期平壌城、後半（586～668年）を後期平壌城とよんで区別する。

前期平壌城の遺跡はピョンヤン市街地の北東の清岩里土城および大城山城である。いずれからも瓦が出土している。清岩里土城は、かつて王宮の所在地と推定されていた（関野貞説）。土城の内部では、瓦の散布地が4箇所あり（図29・A～D）、Cが発掘され、寺院跡とみなされた（清岩里廃寺、『昭和十三年度古蹟調査報告』1940）。A、Dは門に関係するもので、Bは土城内の隅に寄った位置であり、土城の主要な建築の場所とはみなし難い。土城内に王宮があるという前提で、かつCで検出した遺構を寺院と考える限り、王宮建築は瓦葺きではないことになろう。王宮の位置をあえて推測すれば、BとCの間であろう。前期平壌城段階には、上五里廃寺、元五里廃寺、定陵寺などの寺院で瓦が使用される。高句麗後期における墳丘での瓦使用は、漢王墓（慶新里1号墳）にみられるが、それ以降の事例はない。

後期平壌城は、大同江の北岸にそって一部丘陵をとりこみ築造された（周長約23km）。外城、内城、北城に3分されるが、内城にあたる万寿台からは回廊状遺構が検出され、瓦の散布とともに、大型の礎石も見つかった（『昭和十二年度古蹟調査報告』1938）。回廊内に礎石建ち、瓦葺きの王宮建築が存在した可能性が高い。後期平壌城段階の軒丸瓦の瓦当文様は、忍冬文、獣面文などが加わり、多様な展開を示す。新たに、鬼瓦、鴟尾といった道具瓦も登場する。

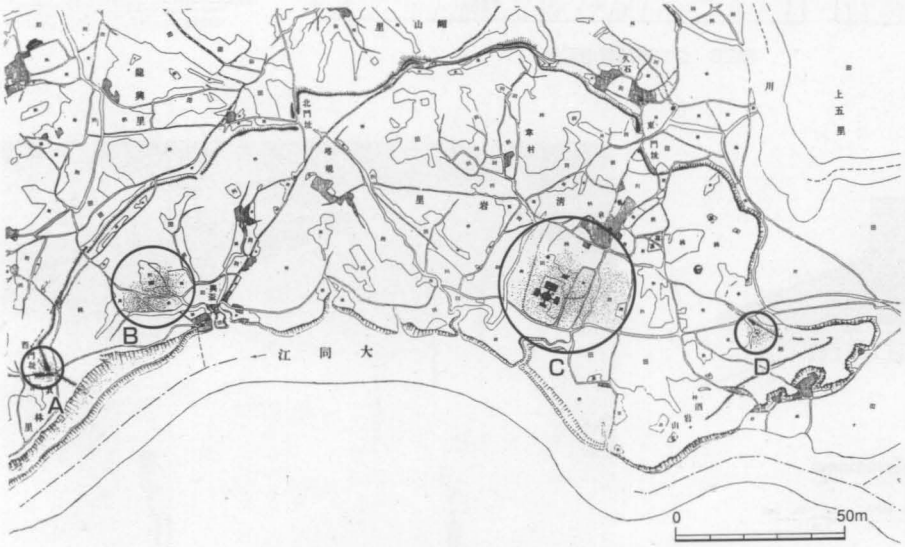
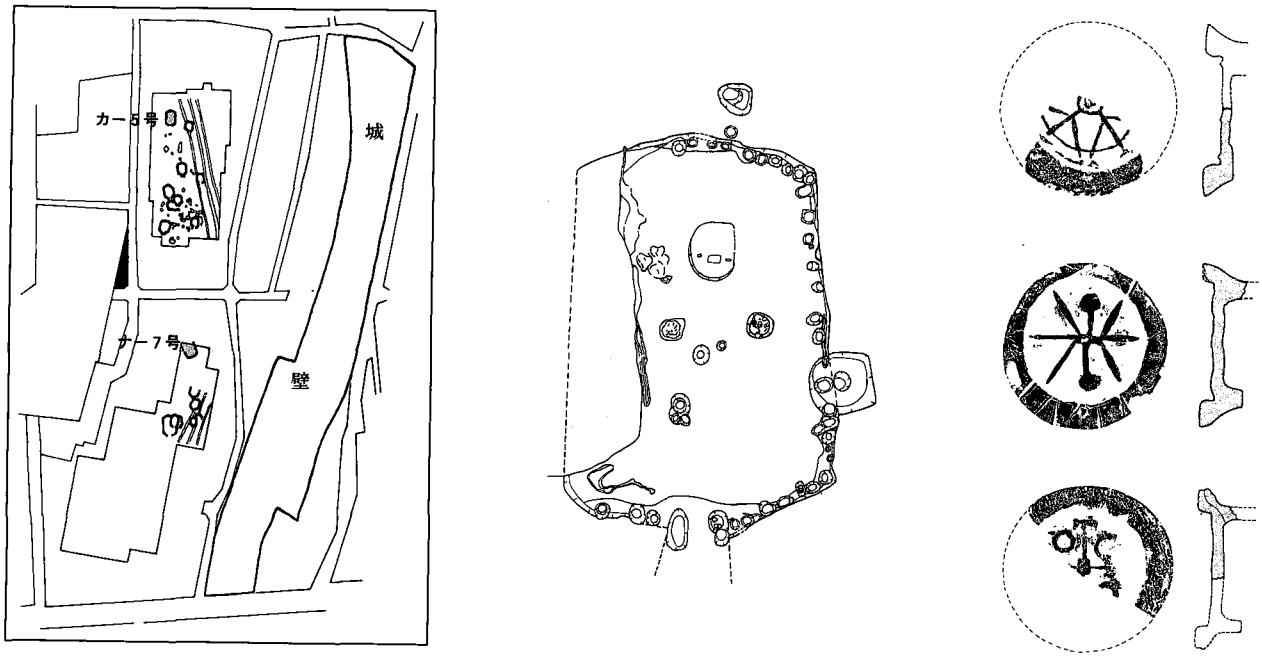


図29　清岩里土城と瓦の散布範囲（円内）
（『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会 1940 に加筆）



風納土城 1：5000　　竪穴住居（カー5号）1：200　　瓦（ナー7号出土）1：6

図30　風納土城の竪穴と瓦（『風納土城Ⅰ』国立文化財研究所 2001による）

百　済

【前期（？～475年、漢城時代）】遺跡はソウルに位置する。漢江南岸に風納土城と夢村土城の２つの土城がある。狭義の「慰礼城」から「漢城」へという、近肖古王26年（371）の王都の移動に対応する遺跡とみられる。

風納土城は、南北に長い不整方形で、周長3.5kmの規模である。近年の土城内の東南より部分の調査で、竪穴住居、土坑などが検出された。うち２棟の竪穴住居（カ-5号、ナ-7号）に瓦が伴う。ほぼ全形のわかる例（カ-5号）でみると、平面六角形で、長さ10.3m、南辺幅7.3mの規模で、内部に炉址と、主柱穴２箇所、周壁に沿う多数の小穴をともなう。部分的に瓦を葺いたとみられている（『風納土城Ⅰ』国立文化財研究所 2001）。

夢村土城は、周長約2.3kmの平面不整形の土城である。瓦と関連のある遺構は、城内西南部の、城内で最も高い場所からやや下がったところに位置する礎石建物、およびその東にある版築建物遺構である。王宮の建築である可能性が指摘されている。

前期の王陵級の墳墓である石村洞４号墳からは風納土城と類似する瓦が出土している。前期の瓦の種類は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、磚がある。瓦当文様は、独自色が強く、系譜を追いがたい（図30）。

【中期（475～538年、熊津時代）】遺跡は忠清南道公州市にある。錦江中流の南岸に築かれた公山城（標高110m、周長約2.7km）内に推定される。城内の広場が発掘されているが、王宮遺構の特定には至っていない。中期の軒丸瓦は推定大通寺跡出土例がある。中期には、磚が墳墓の構築材とされる（武寧王陵など）。中期の瓦磚は、中国南朝系であり、前期の瓦磚とは系譜がつながらない。

【後期（538～660年、泗沘時代）】遺跡は錦江下流の忠清南道扶余郡扶余邑に位置する。扶蘇山城（標高105m、周長約2.2km）の南麓で検出された石垣、池、井戸、道路などの遺構は、宮殿に関係する可能性が高い。瓦も多く出土しており、瓦葺きの王宮の存在が推定できる（官北里遺跡）。なお、後期には多数の寺院が建てられ、瓦の使用が拡大する。瓦の種類は、鬼瓦、鴟尾、垂木先瓦なども加わる。

おわりに　高句麗では、中期に瓦が出現し、墳墓（墳丘）に用いられ、後期になって、山城、寺院、王宮へと使用がひろがる。王宮での瓦使用は、かなり遅い。一方、百済では、前期に土城、墳墓（墳丘）、中期には墳墓（墓室構築材）、寺院に使用される。後期では、山城と王宮にも使用される。前期の土城では王宮への瓦使用がみられる（夢村土城）ほか、竪穴住居での瓦使用（風納土城）という特異な状況が知られ、百済での瓦の採用と建築様式との関連は単純ではない。

以上のように、高句麗、百済のみでも、都城と瓦をめぐる状況は多様なあり方を示す。未調査の古新羅の王宮遺跡をふくめて、朝鮮三国時代の都城の全般的な比較は、今後の調査の進展を待って検討したい。

（千田剛道）